

多読教育の成果と展開

—2009年度、2010年度の多読教育から—

竹 森 徹 士 小 玉 容 子 ラ ン グ ク リ ス
(総合文化学科)

Results and Analysis of Pilot Studies on Extensive Reading Programs Conducted from 2009 to 2010

Tetsushi TAKEMORI, Yoko KODAMA, Kriss LANGE

キーワード：多読 Extensive Reading 英語教育 English Education

1. はじめに

筆者らは、2009年度より本学総合文化学科の学生を対象に多読教育の導入を試みており、2010年度も継続して活動が続いている。その目的は、絶対的な読書量を確保することで英語の運用力を高め、楽しさを実感できる読書を通じて自立的で持続的な学習姿勢を身につけることである。そして、それらを通して学生の総合的な英語力向上を目指している。

ラングは、2009年度には、2年生の必修科目である「卒業プロジェクト」の一環として「多読ゼミ」を行なった。また、2010年度前期には、授業科目「ライティングⅠ」、「ライティングⅢ」でも多読教育を行なった。竹森、小玉、ラングは、2009年度前期から継続的に多読図書の整備を行ない、後期から「多読クラブ」と称する学生自主参加の課外活動を開始し、半期を活動単位とし、現在も活動を継続しているところである。それらの活動のうち、2009年10月初旬までの活動に関しては、本学紀要で報告を行なっている。¹⁾ 本稿では、2009年度から2010年度前期までの多読活動全体の実践状況を述べ、それらの成果を検証する。そして、多読教育の発展に向けた課題について考察するとともに、それらの課題をふまえた現在の活動についても報告したい。

2. 図書の整備

多読教育を始めるにあたって、まず図書の準備と整理を行なった。さまざまなGraded Readers (英語を母語としない英語学習者向け段階別図書)、Leveled Readers (英語を母語とする児童向け段階別絵本)などの多読用図書の情報を収集し、本学の助成金を得て本格的に図書を揃えた。とりわけ、やさしいレベルの図書、いわゆる「読みやすさレベル」(以下、YL)²⁾ではYL0~1前後の図書を重点的に追加する目的で、Oxford Reading Tree (ORT) シリーズを含めた。³⁾

「多読クラブ」開始期である2009年10月時点では、ORT 2~9 (76冊)、Oxford Bookworms (OBW) 1~6 (176冊)、Penguin Readers (PGR) 0~4 (107冊)、Macmillan Readers (MMR) 1~6 (158冊)、計517冊が揃った。

「多読クラブ」開始から1、2カ月を経て、Magic Tree House (MTH) 全冊 (28冊)、さらにYLの低い図書を補うために、I Can Read (ICR) 0~4 (196冊)を加えた。その結果、昨年度から今年度にかけては741冊の図書が揃い、それらをもとに多読を行なった。2010年度後期の活動にあたり、それまでの活動結果の検討を経て、YLの低い図書

を中心に図書を増やすことにした。そこで、ORT 2～7までの未購入分、PGR 1～2までの未購入分、Foundations Reading Library (FRL) 全冊を購入した。これらの図書のYL別内訳は表1のとおりである。

表1 本学図書館所蔵多読図書

YL	2009～10年度前期		2010年度10月	
	冊	割合(%)	冊	割合(%)
YL 0.2-1.0	210	28.3	341	36.9
YL 1.1-2.0	193	26.0	211	22.9
YL 2.1-3.0	179	24.2	212	23.0
YL 3.1-4.0	128	17.3	128	13.9
YL 4.1-5.0	25	3.4	25	2.7
YL 5.1-6.0	6	0.8	6	0.7
計	741	100	923	100

次に筆者らがこれまで行なってきた多読活動に関して、それぞれの活動ごとの実施状況と成果、課題、そして現在の活動について述べたい。

3. 多読ゼミ (2009年度前期、後期)

1) 参加者

2年生6名(英語文化系5名、文化資源学系1名)⁴⁾

2) 手順

2年時の必修科目で、希望によって所属ゼミが決まる「卒業プロジェクト」の一環としてラングが「多読ゼミ」を担当した。多読の有効性を示した多くの研究から有益な示唆をうけつつ、⁵⁾ 主としてBeniko Masonの研究にもとづいて指導した。⁶⁾ まず、初回の授業から数回にわたって、Beniko Mason, *Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*を用いてオリエンテーションを行ない、多読記録ノートを配布した。同書には言語習得理論、多読の学習方法、多読の成果を示す16の研究事例、多読の先輩のメッセージが収められており、学生が多読の意義を深く理解してから多読に臨めるようにした。

学生には、見出し語200語レベルのGraded Readersから始め、基本的に毎日1時間読むように指示した。見出し語数が少ない図書から始めたのは、様々な文脈で反復練習のように同じ単語に繰り返し出会うことで、基本語を定着させる狙いがあるため

である。また、学生にはあらかじめ作成した多読用図書のレベルや進捗を示した大まかな読書計画を渡したが、各自の読書レベルと興味に合った本を選ぶよう伝えた。そこで示した案は表2のようなものである。⁷⁾

表2 「多読ゼミ」年間読書計画表

日程	YL	冊数	読書ペース
4.15～4.27	0.8～1.2	25冊	毎日2冊
4.28～5.31	1.3～2.4	34冊	毎日1冊
6.1～7.21	2.5～3.4	25冊	1週間4冊
8.4～10.5	3.5～3.8	20冊	1週間3冊
10.6～11.9	3.9～4.5	10冊	1週間2冊
11.10～2.8	一般洋書	15冊	1週間1～2冊
総合冊数計		129冊	

また、各図書を読み終わった時点で、多読記録ノートに、読んだ日付、本のタイトル、出版社、レベル、読書時間、ページ数、累計ページ数、簡単なあらすじ、思ったこと、印象に残った語や表現を日本語で抜き出し、毎週提出するよう指示した。担当教員は、この多読記録ノートを見て、それぞれの学生の進み具合、好みの本、問題などを把握していた。

英語の伸びを測定するテストとして、学生はクローズテスト、TOEICを受けた。クローズテストは5月12日と11月24日の2回行ない、それぞれを、多読前(プレ)、多読後(ポスト)の英語力と考えた。テストは、英語圏では6年生(中学校1年生)レベルの1600語程度の長さの文章で、解答時間は60分だった。10単語ごとの空欄に適切と思われる単語を入れる100問の穴埋め形式で、つづりは正確でなくても単語が適切であれば正解とした。

また、本学ではTOEIC IPテストを年2回実施しているため、TOEICも2回受けた(2009年度は6月27日と11月25日に実施)。TOEICはゼミ独自で実施した試験ではないため、実施時期が多少ずれるものの、読解力の伸びを知るため、リーディングセクションのスコアは参考になると考えた。

さらに、学生が多読に対する姿勢を調査、把握するため、アンケートを6月15日と1月26日の2回実施した。アンケートは各項目を5段階(5が最高)で評価するもので、自由回答欄も設けておいた。アンケートの項目は以下のとおりである。

- 問1 英語の本を読むのに抵抗がなくなった
- 問2 本以外でも（新聞、教科書、問題集など）英語で書かれた文章を読むのに抵抗がなくなった
- 問3 英語を読むスピードが速くなった気がする
- 問4 本を読むのが楽しくなった
- 問5 語彙が増えた気がする
- 問6 リーディングの実力がついた気がする
- 問7 文法力がついた気がする
- 問8 これからも続けていけそう
- 問9 他の人にも多読をすすめたい
- 問10 読書のペース（一日に1時間程度）はちょうどよい
- 問11 本の難易度はちょうどよい
- 問12 本の種類が豊富だと思う
- 問13 本数は十分だと思う

3) 読書状況

学生の読書結果は、表3のとおりだった。平均読書総語数は60.8万語で、最も読んだ学生の総語数は129万語であった。6人の平均読書冊数は89冊であったが、その学生は、平均をはるかに上回る162冊もの本を読破した。

表3 「多読ゼミ」の読書結果

学生	クローズテスト		伸び	TOEICリーディング		伸び	総語数	総冊数
	プレ	ポスト		プレ	ポスト			
A	59	67	8	230	310	80	1,291,047	162
B	46	58	12	150	255	105	478,635	73
C	44	50	6	135	215	80	809,340	112
D	39	42	3	100	110	10	690,906	107
E	31	36	5	90	110	20	325,786	68
F	30	34	4	95	95	0	52,194	12
平均			6.3	133.3	182.5	49.2	607,985	89

4) 英語の伸び

表3には多読開始前と後のクローズテスト、TOEICリーディングテストのスコアと伸びも示してある。いずれのテストにおいてもスコアに伸びが見られる。クローズテストはゼミ学生しか受けておらず、比較の対象がないため、その伸びが多読の影響かどうかは分からない。表4は、「多読ゼミ」学生と英語文化系2年生のTOEICリーディングスコアの伸びの比較を行なったものである（表4の英語文化系2年の数は、「多読ゼミ」学生と未受験者の数を除いたものである）。英語文化系2年生の伸びの平均は8.2点だったが、「多読ゼミ」の学生の伸びの平均は49.2点だった。ここで見られる差は多読の成果と考えてよいだろう。

表4 「多読ゼミ」学生の英語力の伸び

	2008年 TOEIC	SD	2009年 TOEIC	SD	伸び	SD
多読ゼミ学生 (n=6)	133.3	53.07	182.5	90.26	49.2	44.32
英語文化系2年 (n=23)	185.5	44.18	193.7	51.84	8.2	40.29

5) アンケート

アンケート結果は図1のとおりだった。

アンケートの結果では全ての項目の評価が上がっており、英語を読むことに対して肯定感が高まったことがわかる。高い数値を示しているのが、問1、2、4、8、9である。学生は英語の文章を読むことに抵抗がなくなり、他の人にも多読を勧めたいなど、多読に対してポジティブな印象がより強くなった。

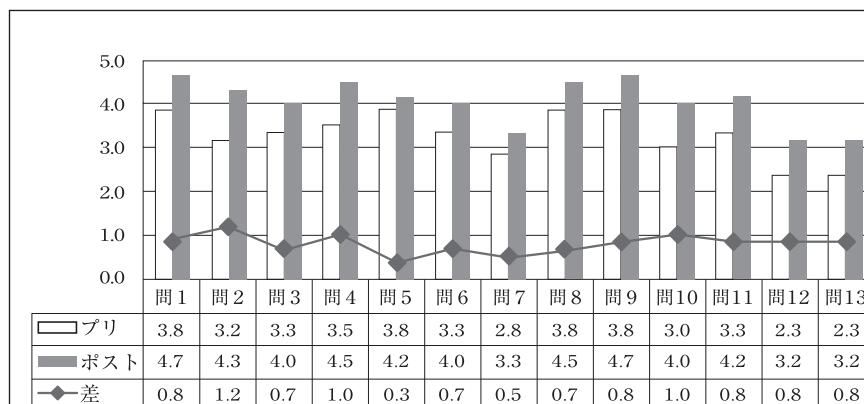


図1 「多読ゼミ」アンケート結果

た。問12、13が低かったのは、年度前半は多読図書の種類が十分ではなかったためであろう。

自由回答にも学生たちの多読に対する前向きな姿勢が示されている。「多読を行ってみて感じたことは、楽しみながら行う学習が言語習得の鍵であるということだ。実際私も、多読を楽しむことで成果が表れた。私にとって多読は、今まで行った学習法の中で一番有効だったと思う。だからこそ、これからも多読を続けていき、さらなるレベルアップを目指したい」、「多読をしたことで気持ちの変化もできてきたように感じる。多読をする前は英語の文章を読むのが嫌いで億劫だったが、今は読むことにも慣れ、読めることが自信になっている」、「普段の勉強とは違い、自分の好きな話を自分のペースで読めたので、楽しかった。また、一年でTOEICの点が150点上がったので、嬉しかった」などの回答があった。

6) 考察と課題

「多読ゼミ」の学生は、自ら多読を選んだ、十分意欲的な学生だったが、そうした当初の意欲を保つことができたのは、多読の効果を信頼していたためだと思われる。試験や成績のためだけならば、これほど多読に取り組むことはなかっただろう。学生は丁寧に記録された多読記録ノートを見返すことで、今までの努力が形となって見えることにより、意欲を維持出来ていたと考えられる。また、ゼミという少人数でのグループで、毎週互いの進捗状況を報告したり、互いに本を勧めあったりといった時間をもうけることで、一体感が強まったことも、意欲の維持につながったのだろう。クローズテストのスコアが全員アップし、TOEICリーディングテストのスコアに関しては、多読ゼミ以外の英語文化系の2年生の伸びと比べても明らかな有意差を示したことは、多読の成果と見られる。

学生にはあらかじめ作成した多読用図書のレベルや進捗を示した大まかな読書計画を渡して、それに沿って読書をするように進めたが、なかには図書のレベルアップについていけず、難しさを感じ、思うように読書が進まなかった学生がいた。ある程度の読書計画を示すことは良いが、学生のレベルをもっ

とよく見極めて、きめ細かい指導をする必要があったと考える。

4. 「ライティングⅠ」、「ライティングⅢ」 (2010年度前期)

1) 参加者

「ライティングⅠ」履修者、1年生14名(英語文化系12名)、2年生2名(日本語文化系2名)

「ライティングⅢ」履修者、2年生8名(英語文化系7名、文化資源学系1名)

2) 手順

いずれもラング担当の授業科目である。まず、4月の授業開始時に多読の説明をし、Beniko Masonのウェッページ⁸⁾を読むことを課題にして、感想を求めた。同ページには、多読の方法、背景となる理論、裏付けとなる研究が紹介され、多読を始める学生への激励の言葉が載っており、ほぼすべての学生が、多読の意義を理解し、意欲を示した。授業時間内には毎回20分の読書時間を設け、事前に図書館から借りてきた本を読む時間に充てた。担当者は、その時間、それぞれの学生たちの進捗を確かめたり、励ましたり、問題がないか、たとえば、難しすぎる本を読んでいたか、あまり読んでない学生がいないか、確認していた。また、授業外では毎日1時間の読書を目標に多読を行なうよう指示した。

学生の意識をさらに高めるため、授業評価の20パーセントを、クローズテストの結果によるものとし、テストのスコアを上げる秘訣は、日々の習慣的な多読にあると説明した。クローズテストは、総合的な英語力を測ることができるため、確かな英語力が身につけば、テストの成績が伸びることになる。

読書記録や読書レポートの提出ではなく、クローズテストの結果を評価の対象にしたのは、多読活動そのものを評価の対象にすると、読書の楽しみが損なわれるのではないかと配慮によるものだった。また、虚偽の記録を提出しようとする学生が出るかもしれない、学生の読書状況が正しく把握できない可能性もあったためである。

3) 読書状況

表5が示すように、「ライティングⅠ」、「ライティングⅢ」それぞれの平均読書総語数は約4.6万語、約3.1万語と、予想していたほど学生の読書量は伸びなかった。

表5 「ライティングⅠ」、「ライティングⅢ」における多読結果

科目	クローズ (プレ) 平均 2010/4/08	クローズ (ポスト) 平均 2010/07/15	平均伸び	総語数
WRⅠ (n=14)	30.1	43.4	13.3	45,745
WRⅢ (n=8)	39.9	46.4	6.5	30,654

4) 英語の伸び

表5が示すように、いずれの授業においても、クローズテストの結果では伸びがみられた。平均は「ライティングⅠ」では13.3点、「ライティングⅢ」は6.5点だった。「ライティングⅠ」では、3点下がった学生がいたが、他は全員伸びていた。26点、35点もの伸びを示している学生がいた。

5) アンケート

「多読ゼミ」で用いたアンケートは行なわず、授業終了後に自由回答として、読書量が少なかった理由を尋ねた。ほとんどの学生が、読書の時間がないという回答であった。また、多読の効果に疑問を持っている学生が2名いた。

6) 考察と課題

「ライティング」への導入は、授業時間内に20分間の読書時間を確保し、多読習慣を身につけさせ、総合的な英語力を伸ばそうとする試みであり、また、多読活動への入り口をできるだけ広げるための試みでもあった。毎日1時間という課題をこなすことは困難であったようで、全ての学生が意欲的に取り組んでいたわけではない。だが、多読に興味を持ち、多読の効果を期待して、授業外でも積極的に読書を続ける学生は増えた。なかには読書量が18万語を越える学生がいたし、自主参加の「多読クラブ」(次

セクション参照)の学生たちの平均語数とほぼ等しい読書量に達する学生もいた。これらの例は授業に多読を取り入れた成果だろう。

今回の試みは、授業時間内の部分的な試験導入であり、「多読ゼミ」の場合のように明確な目標を定めていたわけではなかった。「ライティング」の授業の目的により沿った指導や評価を行ない、多読への期待や意欲をもっと高めることができれば、多読をさらに効果的に授業内で実施することができるだろう。

5. 多読クラブ1 (2009年度後期)

1) 参加者

1年生14名(英語文化系9名、日本語文化系5名)

2) 手順・参加状況

募集チラシで希望者を募り、各参加者には『読書記録手帳』(SSS英語多読研究会)を配布した。初回は10月8日で、以降、週2回(火、木)のペースで、午後6時から6時45分までの45分間、本学図書館内のグループ閲覧室で読書を行ない、竹森、小玉、ラングが毎回常駐していた。初回到図書館の多読図書で最もYLが低いORT2~3から多読を始めるよう指示し、以降は、教員が様子を確認しつつも、ほぼ各自の選択と進度に任せて読書を行なった。教員は、毎回、開始前に開架の棚に並べてある多読図書から、学生の進度に合わせて図書を持ち出し、グループ閲覧室のテーブルに並べ、学生が手にとって選びやすいようにしていた。

実施回数は28回で、初回と最終回(2月8日)に「多読ゼミ」と同様のクローズテストを実施した。活動終了後も「多読ゼミ」で用いたアンケートを行ない、記録確認のため『読書記録手帳』のコピーを回収した。

「多読クラブ」はあくまでも課外活動であり、自主的な参加を原則としていたため、常に出席している学生もいる一方で、途中で来なくなった学生や、来たり来なかったりを繰り返す学生もいたが、出席率は81%で、授業とは無関係の課外活動としては、まずまずの出席率だった。最後にクローズテストを

受けた学生は10名、アンケート回答、記録の回収を行なうことができた学生は8名だった。

3) 読書状況

回収した記録手帳によれば、ほとんどの学生は、多少レベルを行き来しながらも、ORTをほぼレベル順に読み、ステージ9まで読み終えてから、PGR 0～1、MMR1まで進んでいる。読書量は、最低で約4.2万語、最高で約8.5万語、平均で約6.2万語であった。時々借り出している学生もいたが、読書はほぼこの活動時間内に行なわれた。そこで、読書量(語数)と、総実施時間(毎回45分だが、実質35分とし、各学生の欠席時間を除く)から大まかな読書速度を出すと、76wpmの速さで読んでいたことになる。ただし、学生たちは、この時間にただ読書のみを行っていたのではなく、本を読むたびに、本のデータや感想などを記入していたため、実際はもっと速い速度で本を読んでいたはずであり、この数字は最低限の速度と捉えている。

4) 英語力の伸び

英語力の伸びを示す指標として、多読開始直前、直後に行なったクローズテストとTOEICのスコアがある。最後にクローズテストを受けた10名のスコアでは、多読開始前より2点下がった学生を除けば、全員が伸びを示しており、その幅は2点から18点で、全体を平均すると、6.0点の伸びだった。

いっぽう、本学でのTOEICテスト実施時期は、多読を行なった10月から2月までの時期とは重ならない。TOEICを受けた11月時点の学生の読書量は、

2～3万語程度であり、多読の効果を知るには十分とは言えない。また、日本語文化系の学生はTOEICを受けていなかった。そうした状況ではあるが、「多読クラブ」参加の英語文化系の学生9名の7月から11月までのTOEICスコアでは、リーディングパートの伸びは、2名はほぼ横ばい、残りの7名は伸びを示している。その幅は、15点から80点にまで及び、全員の平均では、27.2点の伸びであった。

5) アンケート

アンケート結果は図2のとおりだった(各問の内容は19頁を参照)。

最も高い数値を示したのは、問9であり、続けて問4、8、10、11、12、さらに問1、13が続き、平均で4ポイント台である。逆に、最も低い数値だったのは、問7であり、続いて問5、6、さらに問3、2が、平均として3ポイント台におさまっている。

自由回答で最も多かったのが、「とても楽しかったです」、「とても楽しく読むことができ、あの話、つづきが早く読みたいなあとの多読の時間が楽しみでした」、「本を読んでいると時間があっという間に終わってしまうくらい楽しかったです」、「最終的に全体を通して、本が楽しく読めたので良かったです」といった、読書の楽しさを述べたものであった。また、「絵本から入ったのが良かった」、「ORTシリーズはどれも絵がかわいくて良かった」など絵本の親しみやすさについて言及したもの、さらに「単語が分からず、話の内容がつかめない時は、絵を見て内容を把握したりしました」といった、理解の補助としての絵本の挿絵の役割に触れたものがあった。英

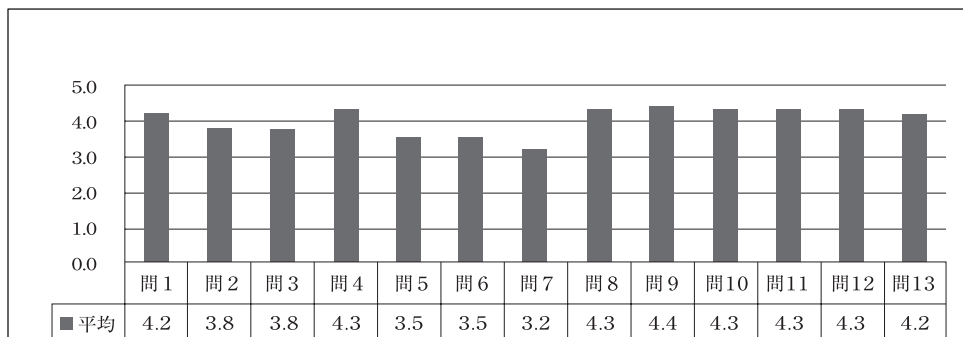


図2 多読クラブ アンケート結果

語の読書、あるいは英語力に関わりそうなものとしては、「少し抵抗がなくなった気がします」、「英語を読むのがはやくなった気がする」、「プライベートでもペーパーバックを読むようになりました」などがあった。

6) 考察と課題

(1) 手順、出席状況について

「多読クラブ1」は最終授業直後の6時より始めていた。これについては、「遅い時間で大変だけど」といったアンケートの声もあり、活動時間を検討することにした。また、火曜、木曜を活動日にしたのは、2009年度後期は、それぞれの曜日の活動の直前に英語、英米文学の授業があり、学生が集まりやすいと予測したためだった。学生の出席率が高かったのは、アンケートでうかがえるような活動自体の楽しさもあるだろうが、こうした設定にも理由があるだろう。

出席率は高かった。ただし、81%という数字では分かりにくい、常に出席する学生と来たり来なかったりする学生がはっきりしていたのが実態である。自主的な活動なので、参加を強制することはなく、活動を行なっている時点では、特別な対応はしなかった。自律的な学習姿勢の育成という点で、課外で行なう活動に意義はあるが、常に好条件が整うとは限らない。翌学期の活動の実態と併せて、この点については考えていく必要がある。

(2) 読書状況について

読書の総語数、進捗、読書速度など、おおよその読書傾向をはじめとして、学生の多読の様子を把握することができた。

多読の第一歩として指示したORTはかなり好評であった。イギリスの子供向けの絵本で、ていねいな挿絵には親しみを感じやすく、また、絵から得られるヒントがあったり、細かな仕掛けがあったりして、挿絵自体を楽しむこともできる。物語もユーモアに満ちており、日常を舞台としながらも、魔法を使って、時間、空間を移動しながら思わぬ波乱が起きることもある。これらに加えて、登場キャラクターが一定なため、物語になじみが湧くと同時に、別の

物語でも展開を予想しながら読み続けられる点にも好評だった理由があるかもしれない。アンケートでも「おばあちゃんがでてくるやつがわりとおもしろいと思う」、「オススメの本はGranおばあちゃんが出てくる本全部です」、「オススメ！Granが出てくる本」、「ORTのフロッピーがダメっぷりを発揮している話が面白かった」といった、特定の特徴的なキャラクターを楽しみに学生が物語を読んでいたことがうかがえる。

こうした楽しみで読書を続けられる学生は、同じシリーズの本を読み進めるのであり、多少の英語レベルの違いはあっても、なじみのある本を読む。活動期間中にYLの低い本を増やすため、ICRシリーズをまとめて購入したが、ICRに手を伸ばす学生はあまりいなかった。中途購入で宣伝が足りなかったということもあるが、シリーズものとして読み進められるORTとは構成が異なっていたこともあるかもしれない。いずれにしても、読書への導入段階が肝要であり、誰もが手取りやすく、楽しむことができるYLが低い図書、具体的にはYLが1以下までの図書を、幅広いジャンルにわたって充実させておくことが、このほか重要であることを実感した。

活動全体としては、読書の楽しみを知るという活動の大きな目的のひとつは達成されたと言って良いだろうし、それがアンケートの結果にも反映されていると考える。しかしながら、いくつか検討すべき課題も出てきた。

当初、筆者らは、週2回の活動に刺激され、自発的に本を借り出して、もっと多くの本を読んでくれるものと期待し、募集チラシに目標の読書量を10～30万語と書いておいたのだが、実際のところ、借り出してまで本を読む学生はまれだった。3週間余り続く冬休みに読書習慣が中断されないように、冬休み前には借り出しを勧めたが、あまり効果はなかった。全員で集まって読書をする分には楽しめるが、そこから個人的な読書習慣を身につけるまでには、まだ一歩というところである。そうした傾向が、アンケートの問8で、5(とてもそう思う)ではなく、4(まあそう思う)を回答した学生が多い結果に示されているのかもしれない。読書の楽しみを損なわ

ないよう配慮するにしても、英語力向上のためには、一定期間内の読書量をさらに増やさなければならぬ。短大の限られた期間で一定の読書量に達するように活動の見直しをする必要があり、改善の検討を次学期に行なうことにした。

(3) 英語力の伸びについて

「多読ゼミ」同様、クローズテストではほぼ全員が伸びを示していた。とりわけ、多読の活動を除けば、英語の授業が週1回程度しかない日本語文化系の学生が伸びを示していたことは注目しておきたい。ただし、クローズテストの数字をどのように理解し、説明すべきかという問題はあり、テスト自体についての研究が必要ではある。TOEICのスコアについては、活動時期とTOEICの実施時期にずれがあること、そして英語関連科目を多く受講している英語文化系の学生が対象であることから、伸びが多読の効果だとは言いきれない。また、対象学生数が少ないため、個人差が結果に与える影響も大きだろう。今回の結果をはじめとして、継続的なデータ収集が必要である。

6. 多読クラブ2 (2010年度前期)

1) 参加者

1年生8名(英語文化系7名、日本語文化1名)、
2年生1名(日本語文化系、継続参加)

2) 手順・出席状況

「クラブ1」と同様に、募集チラシで希望者を募った。新1年生のために説明会を開き、「多読クラブ」の目的、内容などを説明した。初回は4月15日で、新たな参加者に『読書記録手帳』を配布した。その後は週2回(火、木)最終授業終了後の午後6時から6時45分まで、本学図書館のグループ閲覧室で読書を行なった。教員は、それぞれ2週間ずつ交替で活動に参加した。実施回数は説明会を除き26回で、第一回目と最終回は「多読ゼミ」、「クラブ1」で用いたものと同じクローズテストを実施した。記録確認のための『読書記録手帳』の提出は参加者9名中8名だった。

2009年度前期は、授業への導入を開始したことに

より、「クラブ2」と「ライティングI」で重複する参加者がいるが、それぞれでデータを利用している。1回～4回参加した後、参加を止めた学生が2年生で4名、1年生で2名いた。26回中6回参加した学生も含め、最終的な参加者は9名となり、その9名の参加率は61%だった。しかし、学校の他の行事との重なりで欠席した以外は毎回参加した学生も1年、2年とも1名ずついた。

3) 読書状況

継続参加の2年生1名を除き、1年生参加者全員が多読は初めてだったので、「クラブ1」同様にORTの易しいレベルから読み始めることを勧めた。ORTから読み始めた学生が多かったが、中にはICR1から読み始めた学生もいた。ORTから始めた学生は、ほぼレベル順に読み進めていったが、中には3レベルないしは4レベルと大きくレベルを上下させながら読み進めた学生もいた。ORT9まで読み終えた学生は、ICRやMMRへと移っていった。

回収した記録手帳により学生の読書傾向を見ると、ORTが読み易く、途中で他のシリーズへ変更する学生は少なかった。感想・メモの項に、フロッピーという犬の名前やグラン(おばあさん)が、ステージを超えて言及されていることから、キャラクターが定着していくことがシリーズを読み続ける理由の一つになっていると思われる。しかし、ORT8～9(YL0.9～1)になると、知らない単語も多くなり「難しい」という感想も目立つようになる。

継続参加の2年生1名は、既に自分なりの読書方法が身につけていて、ICR1～2、MMR1～2が中心だったが、PGR、OBW、MTHなどのシリーズからも、タイトルに興味をもったものは読んでいた。

読書量は最高で8.7万語、平均で5.7万語であった。最低でも全員が3万語以上読んでいた。先にも述べたように「ライティングI」の受講生との重複があり、多読クラブの時間外に読書をした学生もいただろうが、読書速度を「クラブ1」にならぬ、読書時間は35分として計算してみると、平均86wpmだった。継続学生1名の速度は100wpm程度となり、理想的な読書スピードで読んでいるといえる。彼女の

場合、「クラブ1」での読書速度75wpmと比較すると、読書スピードがかなり速くなっていることがわかる。

4) 英語力の伸び

2年生1名は日本語文化系所属であり、他は全員1年生だったため、TOEICは未受験または1回受験していただいただけだったので、英語力の伸びを示すデータとしてはクローズテストのみである。9名のうちクローズテストを4月と7月の2回受けた学生は6名だった。全員のスコアが伸びており、6点から27点の幅で、平均は15点の伸びだった。

特に、昨年から継続して活動をした2年生が27ポイントと高い伸びを示した。この学生は、「クラブ1」でも毎回出席し、読書量は平均だったが、参加者の中では最高の伸びを示した学生だった。彼女の「クラブ1」からの継続読書量は15万語を超えていた。英語科目の履修がほとんどない日本語文化系の学生が、このような伸びを示したことは多読の継続効果と考えられる。

5) アンケート結果

アンケートは最終回の出席が芳しくなかったこともあり、夏休み後に回答を依頼したところ、4名分を回収できた。傾向としてはこれまでのアンケート結果と同様、問4の「本を読むのが楽しくなった」は平均が4.3、問8の「これからも続けていけそう」、問9の「他の人にも多読をすすめたい」などは平均4.6と高い評価となった。しかし問5の「語彙が増えた気がする」、問7の「文法力がついた気がする」などは平均2.6の評価となり、他の項目と比べて特にポイントが低かった。

6) 考察と課題

(1) 出席状況について

「クラブ1」の活動終了時の感想として、「楽しかった、英語のリーディングスピードが付いた気がする、是非継続したい」と書いていたにもかかわらず、前年度から継続して参加した学生が1名のみだった。また、全体の出席率も「クラブ1」に比べ低かつ

た。

継続参加が少なかった理由としては、以下の2点が大きな理由と考えられる。

a. 「クラブ1」のアンケート結果で、問5～7の「語彙、リーディング力、文法力」の向上についての項目が他と比べて低いポイントだった。英語力の向上を活動参加の目的にしていた学生が、短期間の多読でその効果を実感できず、継続の意欲は持ちつつも行動が伴わなかったと考えられる。ある学生は、どの程度読めばどのくらいの力がつくかわからなくて、読書はおもしろいが今一つ意欲的になれなかった、と言っていた。

b. 短期大学では、2年生前期が就職や進学などのための活動で一番忙しい時期となるので、時間的にも心理的にも、学生が課外活動に積極的に取り組むことが難しいと考えられる。

その他、対象学年が1、2年生となったこともあり、活動日の設定が難しくなったことも出席率低下の一因だっただろう。時間割上、週1回は1、2年生の授業終了直後だったが、もう1回は、参加学生の多くが午前中で授業を終えていた。数名の学生が週1回のみ参加した理由であると考えられる。

(2) 読書状況、読書記録について

読書傾向は「クラブ1」とほぼ同じだったが、2名の学生が10回を過ぎたころから付属CDを聞き始めたことは新しい変化だった。多聴の導入を本格的に考えていきたい。

読書量の計算のために『読書記録手帳』を提出してもらったが、本の題名、語数、YL、感想までしっかりと記録していた学生は8名中3名だった。他は題名のみだったり、感想もなかったりと、様々だった。特に、語数とYLの記録がない『手帳』が目立った。実際、YL0.2から読み始めると1冊の語数が50～60語が中心で、YL0.4まで読み進んでも、100語から長いもので200語程度である。一冊数分しかかからないであろう読書の後、語数やYLを調べて、感想なども記入すると、読書時間以上の時間や手間がかかることになる。記録をとることは大切な作業だが、できる限り煩雑さを減らしていく工夫も必要だと考える。

7. 今後の取り組みと展望

2009年度から2010年度前期までの多読活動を総合的に検証してきたが、これまでの実施状況と成果をふまえた改善点や発展的取り組みについて以下に整理していく。

1) 授業への導入

2009年度は「卒業プロジェクト」の1つ「多読ゼミ」の形で取り組んだ。2010年度は、より多くの学生が多読に取り組めるシステム作りの一方策として、多読プロジェクト担当者科目である、「ライティングⅠ」(1年・前期)「ライティングⅢ」(2年・前期)、「米文学入門」(1年・後期)「英米文学を読むB」(2年・後期)という英語文化系の専門科目での多読導入を試みている。

「ライティング」では、20名を超える学生が図書館で多読本を借り出して、授業で読むという方法をとった。すると、前期の早い段階で、図書館所蔵の易しい多読本が数多く借りだされることになり、その結果、自主参加の「多読クラブ」を図書館で実施する時に、図書数が不足するという問題が生じた。今後このような状況にならないように、10分以内で読めるレベルの多読本(YL0.7まで)は図書館で読むことを基本とする旨を学生に伝えることにしたが、一方で、多人数を対象とした多読活動を実施するには、まだ蔵書数が不足しているという点も明らかになった。

文学関連授業での多読導入は、副読本的な扱いで、文学作品のリトルド版を課題図書として指定することにした。2010年度後期は*The Murders in the Rue Morgue* (OBW 2、YL 2.6)、*A Christmas Carol* (OBW3、YL 3.2)、*The Scarlet Letter* (OBW4、YL 3.8)などを課題本とした。原作に触れることも大切ではあるが、リトルド版を読むことで、作品を読み切り、文学作品を楽しむ読書体験も貴重である。作品に触れ、かつ、英語力の向上につながり、そして後の読書活動に生かされることを期待している。

2) 「多読クラブ3」での改善点

6. 「多読クラブ2」の6) 「考察と課題」で述べ

た事項に関する改善点として、(1)のa.に関しては、半期の具体的な目標値を広報チラシで示した。100 wpmを平均のリーディングスピードとした場合、最低週2回のクラブ参加で10万語を目標値とし、目標に至るまでのモデルスケジュールを示し、半期を終えて到達するだろうレベルをイメージしやすくした。

(1)のb.に関しては、グループ閲覧室での多読時間を週4回確保し、学生が自分のスケジュールに合う曜日、時間を選択しやすくした。

同様に(2)に関しては、YLが低い図書の記録の煩雑さを減らすために、本学図書館所蔵の多読本をシリーズ別、YL別に整理し、タイトル、語数を既に入れた「読書記録手帳1st Stage」を作成した。

また、クローズテストは一定の効果を測ることができたが、1時間を要するテストは負担感が大きく、得点の向上が何を意味しているのかも説明が難しい面があったので、内容理解テストを新規に導入した。

3) 新しい取り組み

図書館に協力を依頼し、グループ閲覧室近くに多読図書用のコーナーを設置した。これは多読図書の存在に学生が気付く良いきっかけにもなっている。また、現在シリーズ別、レベル別に整理されている図書だが、今後図書のYLや語数も簡単にわかるような情報シールを貼っていく予定である。

8. おわりに

短期大学という短い在学期間での英語教育は、多様な学力の学生が入学していることにどのように対応していくかが大きな課題である一方、就職や進学などの進路に関わる活動の早期化が実質的な教育の期間を制限している状況にどう対処していくかという課題もある。英語学習に対する学生の期待も多様であるが、本研究は、総合文化学科の学生の総合的な英語力の向上と英語文化系学生を中心に英米文学・文化に関する専門知識も深められるような、持続可能な英語読書活動をサポートするプログラム作りや授業提供の方法を今後も進展させていくための基礎作りでもある。

【付記】

本研究活動は、「島根県立大学短期大学部松江キャンパス学術教育研究特別助成金（共同研究）」（平成21年度および平成22年度）の助成をもとに行われた。

注

- 1) 竹森徹士、小玉容子、ラング クリス、「多読・多聴による英語力向上を目指して」、『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第48号、pp.47-52、(2010) 参照。
- 2) 読みやすさを0.0から9.9までの数値で示したもので、数字が低いほど読みやすい。高瀬敦子、『英語多読・多聴指導マニュアル』、大修館書店、pp.128-129、(2010) 参照。
- 3) 以下、シリーズ名はアルファベット3文字の省略で示す。シリーズ名後の数字は、各シリーズが定めたレベルを表す。
- 4) 紀要第48号（竹森、小玉、ラング「多読・多聴」）で多読活動の報告をまとめた段階では、「多読ゼミ」所属の学生で必要となるデータを提出できた学生は5名だったが、学年の最後には所属学生全員がデータを提出することができた。そのため、本稿では「多読ゼミ」所属学生数は6名となっている。
- 5) 例えば、Elley and Mangubhai, Tudor and Hafiz, Hafiz and Tudor, Elley, Pilgreen and Krashen, Cho and Krashen, Constantinoを参照。
- 6) Mason and Krashenでは、従来の教育法を用いて指導した一般教育の学生と多読指導を行なった再履修クラスの学生との比較が行なわれている。クローズテストの結果、一般教育の学生の伸びが4.35点だったのに対し、再履修クラスの学生の伸びは8.9点だった。さらに、多読を行なった学生のほうが、意欲的に英語に取り組むようになったという。
- 7) この読書計画はBeniko Mason, *FVR*付属の冊子*Notebook*記載の読書計画を参考に作成した。
- 8) 学生に読むことを指示したサイトは以下である。Beniko Mason, "Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening"
 <<http://www.benikomason.net/students/>>

参考文献

- Cho, K. S., and S. Krashen. "Acquisition of Vocabulary from the Sweet Valley Kids Series: Adult ESL Acquisition." *Journal of Reading* 37 (1994) : 662-67.
- . "Becoming a Dragon: Progress in English as a Second Language through Narrow Free Voluntary Reading." *California Reader* 29 (1995) : 9-10.
- . "From Sweet Valley Kids to Harlequins in One Year: A Case Study of an Adult Second Language Acquirer." *California English* 1 (1995) : 18-19.
- Constantino, R. "Pleasure Reading Helps, Even If Students Don't Believe It." *Journal of Reading* 37 (1994) : 504-05.
- Constantino, R., S. Y. Lee, K. S. Cho, and S. Krashen. "Free Voluntary Reading as a Predictor of TOEFL Scores." *Applied Language Learning* 8 (1997) : 111-18.
- Elley, W. "Acquiring Literacy in a Second Language: The Effect of Book-Based Programs." *Language Learning* 41 (1991) : 375-411.
- Elley, W., and F. Mangubhai. "The Impact of Reading on Second Language Learning." *Reading Research Quarterly* 19 (1983) : 53-67.
- Hafiz, F., and I. Tudor. "Extensive Reading and the Development of Language Skills." *English Language Teaching Journal* 43 (1989) : 4-13.
- Mason, B., and S. Krashen. "Extensive Reading in English as a Foreign Language." *System* 25 (1997) : 91-102.
- Mason, Beniko. *FVR: Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*. Seizansha, 2006.
- Pilgreen, J., and S. Krashen. "Sustained Silent Reading with English as a Second Language High School Students: Impact on Reading Comprehension, Reading Frequency, and

- Reading Enjoyment.” *School Library Media Quarterly* 22 (1993) : 21-23.
- Tudor, I., and F. Hafiz. “Extensive Reading as a Means of Input to L2 Learning.” *Journal of Research in Reading* 12 (1989) : 164-78.
- Woodford, P. *An Introduction to TOEIC: The Initial Validity Study*. TOEIC Research Summaries. Princeton : Educational Testing Service, 1982.
- 伊東 英 「生涯教育課程における英語多読授業の導入」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』第10号 (2008) : 219-23.
- 井上 徹 「多読プログラム — 常盤タドキスト運動実践報告」『常盤国際紀要』第11号 (2007) : 139-53.
- 此枝洋子 「英語多読活動で学生はどう読んでいるか？」『梅花女子大学短期大学部研究紀要』55巻 (2007) : 19-25.
- , 「手作り補助プリントで学生の読解を助ける指導」『梅花女子大学短期大学部研究紀要』54巻 (2006) : 49-57.
- 高瀬敦子 『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店, 2010.
- , 「やる気を起こさせる授業内多読」『近畿大学英語研究会紀要』第2号 (2008) : 19-36.
- , 「大学生の効果的多読指導法 — 易しい多読用教材と授業内読書の効果」『関西大学外国語学部外国語教育フォーラム』第6号 (2007) : 1-13.
- 竹森徹士、小玉容子、ラング クリス 「多読・多聴による英語力向上を目指して」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第48号 (2010) : 47-52.
- 寺西雅子・松浦加寿子 「多読指導法の実践とその効果」『くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要』第37巻1号 (2004) : 67-78.
- 山崎朝子 「英語教育における多読指導に関する実態調査」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』第9号 (2008) : 103-112.
- , 「多読の効果 — 大学における多読授業実践 — 」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』第10号 (2009) : 84-91.

(平成22年11月26日受理)